妻たちの定年宣言

NHKアナウンサー
古屋和雄

現代しあわせ探し

妻たちの定年宣言

現代しあわせ探し

NHKアナウンサー
古屋和雄

講談社

古屋和雄（ふるや　かずお）

1949年山梨県生まれ，富山県育ち。1972年早稲田大学政経学部卒業。
ＮＨＫ入局。福井放送局，釧路放送局を経て，1978年よりＮＨＫ放送センターアナウンス室所属となる。
「くらしのカレンダー」「きょうの料理」「ひるのプレゼント」のあと「おはようジャーナル」のキャスターを勤める。
著書に『「愛されたい」症候群』がある。

妻たちの定年宣言
——現代しあわせ探し

1989年11月27日　第１刷発行
1990年６月22日　第４刷発行

著者——古屋和雄
定価——1200円（本体1165円）
© Kazuo Furuya 1989 Printed in Japan

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21　郵便番号112-01
☎　東京 03-945-1111（大代表）
装幀——山岸義明
印刷所——慶昌堂印刷株式会社
製本所——株式会社黒岩大光堂
●落丁本・乱丁本は，小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替いたします。なお，この本についてのお問い合わせは学芸第二出版部あてにお願いいたします。
ISBN4-06-204548-6（学２）

普通のしあわせ——アナウンサーが絶句する時

私がアナウンサー生活十五年にして、初めて涙で喋れなくなった放送は、昭和六十二年十二月十七日のことでした。九州高島炭鉱が閉山して一年後、炭鉱で生計をたてていた家族の生活はどうなっているのか、長崎放送局の中尾益巳ディレクターから報告されました。

前年十一月二十七日に閉山して一年の間に、高島から三五〇〇人の家族が全国各地に旅立ち、島の人口は二〇〇〇人を割っていました。鉱業所跡には、炭鉱（ヤマ）の男たちに新しい技術を身につけてもらおうと、臨時の職業訓練校ができました。かんな研（と）ぎや溶接を学ぶ六〇人余りの男たちのなかに蛎崎工（かきざきたくみ）さんがいました。

蛎崎さんは、十八年間、炭鉱の下請けの掘進作業員として鉱道を掘る仕事をしてきました。妻と子供二人の暮らしを守るために地元で職を探しましたが、家族を養える職場はなかなか見つかりません。

閉山で解雇された一七〇〇人のうち再就職のできた人は三割にすぎません。蛎崎さん一家も国から毎月支給される一四万円の雇用保険で生活をまかなってきました。

妻のフサ子さんは、夏から体調を崩して長崎市内の病院に入院し、家事は高校三年生で長男の直八君と、二年生で長女の智恵子さんが分担していました。二人が通っていた県立高島高校は島でただ一つの高校です。

三年生五一人は、卒業後全員が高島を離れます。直八君も、閉山で大学進学をあきらめ、長崎市内で働くことになっていました。

島には昔から音楽サークルがあり、若い炭鉱の男たちが中心だったこのサークルも、今はほとんどが高校生です。直八君も当時メンバーのひとりとして、小学校の使われなくなった教室で練習したものです。その年はクリスマスに開くコンサートで、直八君の作詞作曲した『高島の歌』をみんなで歌うために、練習を続けていました。

「自分たちは出て行くけど、今までの高島の感じを変えないで頑張ってほしい。そがん感じですけど」

ちょっぴりはにかみながら、「がんばれ高島また来るからね！」と、ギターの弦もちぎれんばかりに歌を繰り返すのでした。

妹の智恵子さんには後輩がいません。同級生も親と共に島を離れた人が多く、一四人にまで減ってしまいましたが、どうしても高島高校を卒業したいと願っていました。

そんな家族の思いを痛いほど感じている父親の蛎崎さんでしたが、雇用保険の世話になるより自分の力で働きたいという気持ちも募り、生活のために家族を置いて出稼ぎに行った仲間た

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ちのことも気になっていました。

愛知県名古屋市の地下鉄工事現場には三人の仲間が働いています。月収三〇万円のうち半分以上を家族に仕送りし、三人は、寮の同じ部屋で生活を共にしていました。

「家族はやっぱり向こうにおいとくばい。やっぱり帰る所がなからんばね。高島はよか思い出ばっかり。仕事すっときは一生懸命して、やっぱ寝る時になったら、向こうのこと思うばい」

毎晩、酒を飲みながら三人の話題になるのは、高島に残してきた家族のことばかりです。

蛎崎さんは、思い切って名古屋で働いている仲間に電話をして、単身、高島を離れる決心をしました。

その晩、何があっても家族一緒に暮らしたいと思っていた直八君は、不機嫌でした。

蛎崎さんは、チビリチビリ晩酌をしながら重い口を少しずつ開きました。

「家族のことがあるけん……行かんばしょうがなかとやろね。俺一人やったら……お前たちがおるけん……いろいろ考えたりしてさ。お前たちが一人前になるまでは親の責任やけん。俺は絶対間違うとりゃせんぞ」

黙々と体を動かすことで家族を支えてきた蛎崎さんは、決して言葉数の多い人ではありません。でもその絞り出すようなひと言ひと言には、動かし難い重みがありました。

蛎崎さんが炭鉱に夢を抱いて高島に来たのは二十八歳の時。高島での十八年間は家族や仲間に囲まれ、安心して暮らせた日々でした。

蛎崎さんは高島を去る日、久し振りにネクタイをしめました。背広にブラシをかけてくれたのは直八君でした。直八君と智恵子さんは、学校を休んで長崎まで見送ることにしました。かつて見送りの人で溢れた高島の桟橋も寂しく、その日、蛎崎さんを見送ったのは、職業訓練校の仲間だけでした。

「もう出発となればさ、腹に決めるけんね。炭鉱の意地ば出して気ばらんばたい。誰のためでもない。家族皆のためにさ」

家族と一緒に暮らしたい、という願いが叶わなくなったつらさを振り切り、蛎崎さんがJRの長崎駅に着いたとき、長崎市内に入院していた妻のフサ子さんが見送りに駆けつけたのです。フサ子さんは三ヵ月の入院で病状がやや回復に向かっていると言います。

「うちは今月いっぱいか、来月初めころ退院できるけん、あんたも体ばこわさんで」

「なるべく退院したほうがよかばってん、早よ退院して、また後戻りしたら何にもならんやろ」

「そりゃわかってる」

こんな両親のやりとりを、缶ジュースを手にした長女の智恵子さんが笑いながら見守っていました。久し振りに家族四人の笑顔がそろったのは別れの日だったのです。

列車が動き出しました。座席にすわった蛎崎さんは、三人の顔を一人ひとり確認し、窓ガラスに骨太い掌をあてました。ホームからその窓ガラスに掌を重ねたフサ子さんは、列車と一緒

に歩き出しました。二人の子供がいつまでも手を振り続けていました。

昭和六十二年十二月十七日の『閉山一年・家族の旅立ち』は、こうして、蛎崎さんの家族の姿を映し出し、カメラがスタジオに切り換わった瞬間、私は絶句してしまったのです。いつもは何かひと言、感想を言うのが私の役目なのですが、その時はさすがに何も言えませんでした。

家族のために黙々と働く父親、それを気遣う子供たち、掌をガラス越しに合わせただけで通じ合う夫婦、それぞれが交錯し合って私の頭の中に渦巻いていました。

日本が豊かになり、産業構造が変わったからといって、地道に日本人の暮らしを支えてくれた家族が、バラバラになっていいものでしょうか。私は怒りにも似た気持ちをどこに向けたらいいのかわからないまま涙を拭うことも忘れていました。

放送終了後、たくさんの人たちから電話や便りをいただきました。その多くは、「私も途中から涙が出てしかたがありませんでしたが、古屋さんの顔を見て、またグシャグシャになってしまいました」というものでした。

中には、「言葉を失ってしまった古屋さんを叱ったり首にしたりしないでください」という励ましもいただきました。そして一年以上たった平成元年の正月、『人間テレビ』の「思い出の名場面集」にリクエストまでいただくことになったのです。

私たちは、毎日の番組で、『くらし』を大切に見つめていきたいと考えています。「普通に暮らしたい」、この思いが今ほど切実に聞こえる時はありません。物は豊かになったと言われながら、本当に幸福と言い切れる人がどれだけいるでしょうか。物や情報の渦の中で、誰もが自分なりの、「し・あ・わ・せ」の四文字を探しています。

男たちが作り上げてきた「成長」の神話に異議を申し立てる妻たち。家族に何の言葉も残せず、働き過ぎ社会の中で、突然の死に見舞われる夫たち。地価高騰でマイホームの夢を奪われた都会の家族と、「効率」の名の下で、暮らしたい所に暮らす権利を奪われた地方の家族。学力だけでなく性格まで偏差値で計られ、大人に対して声が出なくなる子供たち。人生の大切な締めくくりに病院さえ追われるお年寄りたち……。

いつも弱い立場の人がツケを負う社会は決して健康ではありません。時代が昭和から平成に変わった今こそ、私も自分なりの「し・あ・わ・せ」を探してみたいのです。

妻たちの定年宣言◉目　次

——現代しあわせ探し

普通のしあわせ――アナウンサーが絶句する時

第一章　妻たちの定年宣言

選挙を熱く闘った女性たち　12
「定年」に映し出される夫婦のギャップ　29
ダブルポケットと夫婦別姓　40
広がる女性のネットワーク　49

第二章　「突然死」と「ガン告知」

お父さんはなぜ死んだの？　66
眠りたいのに眠れない　76
ハツカネズミと乾いたタオル　81
「自分」を探しはじめた夫たち　93
叔父の「ガン闘病記」　101

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

家族の胸に生き続けるために　111

第三章　非トウキョウ的生活——怖い便利さ・良い不便さ

村に都会の人がやってきた　126
地価高騰が教えた成長への片想い　132
「東京」と「地方」が出逢う場所　150

第四章　「いい子」の反乱——管理を拒む子供たち

性格にも偏差値？　164
「緘黙（かんもく）症」と「待てない病」　175
学校に行けなかった僕たち　182
「生活科」と「一杯のかけそば」　189

第五章　長生きがしあわせと言えるために――高齢化社会の「医」「職」「住」
「医」お年寄りは宅配便じゃない　202
「職」いつまでも現役でいたい　225
「住」黄色い旗は元気の合図　234
おわりに――自分の物語を生きていきたい　250

第一章　妻たちの定年宣言

選挙を熱く闘った女性たち

「二度寝」

平成元年七月は、女性たちの熱い思いが重なって、例年に増して暑い季節でした。そして、私にとっては、睡眠不足の日曜日が二度やって来ました。

いつも日曜日は、月曜日の放送の打合せのため休めないのですが、それでも毎日朝の早い私を気遣って、午後から打合せが始まるのです。つまり、日曜日の午前中は、日ごろの睡眠不足を補うように「二度寝」というささやかな楽しみがあるのですが、七月二日と七月二十三日は、私の数少ない趣味のひと時を奪われてしまいました。

それは誰あろう、最も私の生活パターンを理解しているはずの妻の仕業(しわざ)でした。

「早く起きて！　今日は選挙よ！」

血圧が低目のはずの妻に、朝からこんなに元気があるなんて、結婚九年目にして私は初めて知らされました。

七月二日は、東京都議会議員選挙。七月二十三日は、参議院議員選挙。いつもは私が切り出さなければ腰を上げない妻が、この時ばかりは私をひきずるように、足早に投票所に駆け込ん

だのです。参議院選挙の前夜など、わが家はちょっとしたパニックに陥っていました。妻が突然叫びだしたのです。

「ない！　どうしよう？　ない！」

私は妻の言葉に主語が見つからず、ただただ呆気にとられていました。それは、投票用のハガキのことでした。古いハガキを引っ張り出すわ、新聞の間を隈なく探すわ、終いには、ゴミ袋まで覗きはじめました。およそ一時間、妻はへたりこむように椅子に身を投げ出しました。

結婚指輪だったらこんなに真剣に探すだろうか、などと思いながら、私は区役所に電話をするはめになりました。電話の答えは拍子抜けするほど簡潔でした。

「なければ結構です。印鑑を持って投票所にお越しください」

こうして参議院議員選挙には、確実に清き一票が投じられることになりました。

私の妻のように、今回だけは棄権できない、いや自分の一票が、これまで手の届かない所にあると思われた国政に反映するかも知れないという気持ちが、多くの人を投票所に運びました。

それにしても、夜中の電話に親切に応対してくれた区役所の方には、本当にご迷惑をお掛けしてしまいました。

女性たちの熱い選挙

平成元年の選挙は、特に女性が燃えた選挙でした。

参議院選挙は、改選数一二六議席のうち、女性は一〇から二二と倍以上に増えました。日本各地で、女性候補や女性有権者は、どのように動いたのでしょうか。

昭和四十九年以来、自民党の二議席独占が続き、保守王国と呼ばれた熊本県では、無所属の紀平悌子さんが一位で当選しました。三年前次点だった時とは、市民の反応も違っていました。

「男性の大臣たちから女は何もできないように言われて悔しい思いをしています。何とかはねのけてほしい」

「女だってできるんです。普段の生活でも何かにつけて女性は差別されてますからね。私たちの分も頑張ってほしいんですよ」

三年前の選挙のあと、紀平さんの活動を応援する人たちが集まって、「県民の会」が創られ、今回も、政党や労働組合とは別に、独自の支援活動を続けました。事務所に出入りする女性たちは、家事や育児の合い間に好きな時間を使って、自分でできる範囲のことをします。

奇麗な風呂敷に、差し入れの弁当を包んでやってくる人もいます。発泡スチロールの容器をビニール袋に下げてくる市販の弁当とはまるで違います。彩りも鮮やかで、栄養にも気を配って野菜の煮付けなどもたっぷり。選挙のイメージにある固さや悲愴感は少しもなく、これが野外なら、楽しいピクニックかと思えるほどです。

ボランティアの主婦が家に戻り、それぞれがいつもの暮らしについたあとも、事務所には人が残っていました。選挙期間中、毎日寝泊まりしながら、電話を受けたり日誌をつけたりして

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com